

視覚障害者の食事援助

——弁当での食事——

視能訓練士学科 3 年制

【背景】

近年、視覚障害者がホームから転落する事故や交通事故など、普通の生活に関する視覚障害者のニュースが数多く取り上げられている^{1,2,3)}。視覚障害者の歩行行動の援助に関する研究は数多く行われており、視覚障害者の歩行誘導については周囲の理解がある。しかし、食事に関する研究は不明な点が多く、家族や周囲の理解不足が問題視されている^{4,5)}。

そこで今回は弁当に着目し、視覚障害者への快適な食事援助につなげるために、アンケートによって視覚障害者と晴眼者の相違について調査し、我々が配慮すべきことを検討した。

【対象および方法】

対象は、視覚障害者 13 名（先天性疾患 4 名、後天性疾患 9 名、身体障害者手帳等級 1 級 9 名、身体障害者障害程度等級 2 級 4 名、男性 7 名、女性 6 名、年齢 61 ± 22 歳）と本校視能訓練士学科 3 年制 3 年 13 名（男性 1 名、女性 12 名、年齢 21 ± 5 歳）。弁当での食事に関する自作のアンケート（選択項目 36 問、自由記述 10 問、合計 46 問）を視覚障害者には口頭にて、晴眼者には視覚障害者がどのような回答をするのかを予想して回答してもらった。そのアンケート結果を選択項目にはカイ二乗検定、自由記述には KJ 法を用い、視覚障害者と晴眼者の考え方に相違があるのかを検討し、その結果から我々の配慮すべき内容を考察した。

【結果】

質問項目では、36 項目中 15 項目に有意差がみられた。今回はとくに有意差が大きかった ($p < 0.04$) 8 項目について示す。

まず、視覚障害者は食べ物を口にした際、食べている物がわかるため味覚情報は必要ないと思っているが、晴眼者は視覚情報なしで味はわからず、味覚情報を教えてほしいと視覚障害者は思っているという考えであった。次に、視覚障害者はおかずカップなどを口まで運んだことが実際にあるが、晴眼者は箸で掴めばわかるという考えであった。また視覚障害者は残量や食べ終わりの判断が可能であり、かつ食事を楽しんでいるが、晴眼者は食事を苦に感じていると考えていた。そして視覚障害者は食事中常に晴眼者に援助を求めることはないという結果であった。

自由記述については、視覚障害者はおかずカップなど事前によけてほしい (70%)、配置を教えてほしい (54%) の意見が多かった。

【考察】

視覚障害者が弁当で食事をする際には、おかずカップなどの誤飲する可能性があるものは事前に避け、食べられるもので代用するなどの工夫が必要であると考ええる。また弁当やコップ、箸などの食事配置を重要視しており味覚以外の情報を求めていないため、視覚以外の情報を伝えることは過剰な援助介入に繋がると考えられる。そして、視覚障害者は弁当の残量や食べ終わりを把握するために箸で弁当箱内をさぐるなどの工夫を行いながら食事をしているため、食事を苦に感じることはなく、その結果食事を楽しんでいると考える。

【まとめ】

視覚障害者がどのような環境で食事を摂りたいかを知り、援助していくことが楽しく食事することに繋がる。まずは事前に声掛けを行い相手の要望を把握することが快適な食事環境を提供するための第一歩である。

【文献】

- 1) 和氣洋美：低視力・視野狭窄シミュレーションでの歩行等動作。人間科学研究年報。2, 2008, 5-30.
- 2) 所敬：視覚障害者と日常生活活動。視覚の科学。28 (2), 2007, 55-59.
- 3) 大森清博：ロービジョン者と晴眼者に対する路面誘導サインの効果の検証。土木学会論文集。70 (5), 2014, 961-969.
- 4) 大上幸子：視覚障害の疑似的体験に基づく食事援助についての検討。葦。32, 2001, 168-171.
- 5) 鈴木文子：障害者の食事と問題点。食生活総合研究会誌。14 (1), 1993, 23-26.